

〔書評と紹介〕

関根達人著

『墓石が語る江戸時代 大名・庶民の墓事情』

長谷川成一

このたび、弘前大学人文社会科学部の関根達人教授が、吉川弘文館の叢書「歴史文化ライブラリー」から右書を上梓した。長年にわたって調査を継続し成果を発表し続けてきた墓石研究の成果を、このような形で分かりやすくかつ親しみやすく、一般の方々に身近なものとして知らしめたことは、斯界の発展に大いに寄与するのではないかと思われる。

評者は、周知の通り考古学に関しては全くの門外漢で、本書の批評にはあるいは適任ではないのではないかと思われ、的外れの記述もあるかもしれないが、まずは内容の紹介から始めて、物質文化に不案内ながらも若干のコメントを加えることで何とか責めを塞ぎたい。

本書の大目次を、以下の列挙しよう。

「石に刻まれた歴史」を読み解くープロローグ

墓Ⅱ墓石ではない！

墓石から何が分かるか？

墓石から分かる歴史災害

墓石に見る社会構造

大名墓に込められた思い

墓石に現れたヒト・モノ・情報の交流

「墓石文化」を考えるーエピローグ

「石に刻まれた歴史」を読み解くープロローグでは、墓石に及んでい
る現代的危機を記し、考古学研究者が墓石研究に取りくまなければなら
ない必要性を述べ、当該研究の出発を現代の墓事情や文化財保護の観点
に基づくものと位置づける。

墓Ⅱ墓石ではない！の章は、墓は世につれの節で、縄文時代以来のお
墓と墓石の歴史を紹介し、中世から墓石が出現した経緯や墓石が石垣や
仏像の代用品として再利用されてきたことも写真を活用して述べている。
私ごとで恐縮だが、四〇数年前、評者は奈良県大和郡山市の柳沢文庫へ
調査に赴いた際に、郡山城本丸の石垣に長身の石像仏（通称さかさ地蔵）
がはめ込まれているのを見て驚愕した経験があり、石垣の中には墓石も
存在したようで（その時には気がつかなかったが）、当時のことが思い
起こされた次第である。ついで現代墓石事情の節では、現代の墓の多様
化と無縁化の現状を紹介し、従来、当たり前と思われてきた弔いのあり
方が現代社会にマッチしなくなった現状をお墓の状況から説き起こして
いる。評者も含め読者の皆さんも、色々な感慨を持って郷里の檀那寺の
情景が思い起こされるのではなからうか。

墓石から何が分かるか？の章は、墓石と過去帳の節で、墓石に刻まれ
た情報の特徴と過去帳との対照による調査方法、墓石の調べ方の節では、
悉皆調査の困難さと墓石調査の実際的な仕方を説明する。拓本などによる
伝統的な調査手法だけでなく、3Dスキャナによる最新の三次元計測な
どを紹介し、読者に墓石調査の魅力をアピールしている。墓石の造立年
と保有率の節では、刻まれた年号の吟味に加え、墓石を持つことができ

た階層を津軽黒石領の過去帳との対照から導き出し、従来の通念を改めるべきと提言する。墓石の変化と地域色の節では、庶民の墓が戦国期から出現したことを述べ、複数の地方の墓石数の地域的、時間的な推移をグラフに示し、墓石の形態や流行などを踏まえて墓石の豊かな多様性と地域性を指摘する。

墓石から分かる歴史災害の章は、歴史人口学にチャレンジの節で、一八世紀中期の東北地方に大きな被害を及ぼした宝暦飢饉を主に取りあげ、墓石の情報と過去帳を比較対照して従来の通説には問題があると主張する。死亡クライシス年を探せの節では、蝦夷地松前の墓石調査の成果を活用して、同地の人口動態の変化を示し、死亡者が特に多い死亡クライシス年の特徴を導き出す。一八世紀後半の天明大飢饉における被供養者数が、地域的に近接しているにも拘わらず、津軽と松前では相違する点を指摘し、理由は食料供給の地域特性にあるという。

墓石に見る社会構造の章は、墓石に現れた階層の節で、前近代の墓石は身分制社会の中にあつて身分制を如実に反映していることを指摘する。主に福井県小浜での調査に基づいて戒名や名字・屋号・名・グループの俗名から探り、藩士たちの墓石にも階層が存在したという。墓石に見る家族像の節では、墓石に刻まれた戒名の人数から、どのような人々が墓に入っているのか、先祖代々の墓の成立に加え、松前藩で代々家老職をつとめた蠣崎家の墓所にある墓石から、同家の家内秩序が墓所に示されていることを明示する。墓石に現れた個性の節では、著者が調査した墓石の中でとくに印象に残った墓石を紹介している。墓誌を印した墓石、辞世を記した墓石、肥後細川家の京都の大徳寺塔頭の一つ高桐院にある

ユニークな墓石、動物の墓石などを興味深く記し、江戸時代には個性的な墓石が出現したことを実証している。

大名墓に込められた思いの章は、国元の墓と江戸の墓の節で、近世大名の墓は江戸と国元の双方に存在したことを指摘し、本葬墓と分霊墓の見わけがいかに困難であるかを述べる。また大名墓での上部施設は、改葬や神仏分離、廃藩置県などの近代に入ってから事情が作用し、現在、私たちが見ている状態と当時とは相違する例があることに注意を喚起している。高野山奥之院の大名墓の節では、和歌山県高野山の奥之院所在の、膨大な量の大名の墓石や石造物を紹介し、判明した墓石の石工銘から彼らの出身地を特定し、これらの石工が全国各地へ拡散して近世石工が誕生したという。

墓石に現れたヒト・モノ・情報の交流の章は、墓石の北前船の節で、北前船が活躍した日本海沿岸地域のなかでも出発点である敦賀・小浜・三国の各湊町と、終着点である箱館・江差・松前の蝦夷地の各湊町の盛衰を墓石の増減から類推している。そして、北前船に使用されたバラトが各地で墓石として使用されたケースを紹介し、各地の墓石の流行にも日本海海運によってもたらされた情報の伝達が影響しているという。蝦夷地の墓石の節では、アイヌのクワ（杖、アイヌの人々の伝統的な墓標）を紹介し、幕府による蝦夷三官寺の開創、和人の蝦夷地への政治的・経済的な進出と蝦夷地に広範囲に展開する和人の墓石との関係を解き明かしている。

「墓石文化」を考える―エピソードは、本書の総括であり、江戸時代に墓石が普及した理由を六点にわたって指摘し、墓石の考古学の現状と

将来における課題を指摘している。

以上、本書の内容を章節に従って簡単に紹介してきた。本書の根幹を支えているのは、広範かつ膨大な墓石調査の成果であることは、一目瞭然である。生の調査データを豊富な図表やグラフ・イラストで加工して、読者により分かりやすく示す工夫を施しており、本書のシリーズである歴史文化ライブラリーの趣旨にも適合していると言えよう。加えて、右の調査成果を寺院過去帳との比較校合によって検証し、文献史学の研究成果も取り入れて適切な分析をおこなっていることから、論証のあり方は多角的でありかつ説得力がある。

内容の紹介に於いても述べたように、本書は調査データを駆使した、ある意味ではオーソドックスな学術的著述であるにも拘わらず、墓石の現状や葬制の変化など、各章にて現代的な社会問題に絡ませて論を展開しているので、読者にとっては親しみやすく、身近な問題として身につき、まさされる人も多いのではなからうか。単なる歴史事実の報告ではなく、読者を引きつけ、読ませる工夫は見事である。評者にとっても、従来の文献史学で通説とされてきた事柄に、墓石というモノから再考を迫る本書の新たな成果について、今後、更なる研究の深化を痛感させられた次第である。

本書の墓石に現れたヒト・モノ・情報の交流の章では、北前船の寄港湊について触れ、当時活躍した讃岐国塩飽衆の日本海沿岸地域への拡散・移住に言及している。評者も『本莊市史 通史編Ⅱ』（本莊市 一九九四年）第八編第三章「藩政期の人々のくらし」において、安政三年「人別取調書上帳」から羽後国本莊城下と同湊での塩飽衆の存在と通婚

圏を取りあげたことがある。著者は「今後、北前船の寄港地での墓石調査を積み重ねるとともに、明治時代の墓石にまで調査対象を拡大することで、近世から近代にかけ日本海交易がどのように推移したか、湊町の盛衰の観点から説き明かす必要がある」（本書二〇四頁）と述べている。全く同感であり、これからの期待したい。

なお、本書でやや残念なのは、研究文献の出典については、著者・出版社・出版年の記載はキチンとなされているが、文献資料の出典が詳細でないことである。本シリーズの性格からすれば致し方のないことであろうが、依拠した資料の所蔵機関、あるいは掲載されている叢書（例えば、『：：県史』、『：：市史』など）の記載がないため、原典に当たりたいと思っても確認が難しい。また、本書に掲げた豊富な図表・グラフは有り難いのだが、四六判という判型のため、図中の数字や文字が小さく、評者をはじめとする高齢の読者にはやや取っつきにくい印象を与えるのではないかと危惧される。

右に述べた点は、望蜀以外の何ものでもなく、本書の価値を一切損じるものではない。本書は、「墓石の考古学」への高質な入門書の役割を果たしており、一般読者はもちろん、これから考古学を志す、あるいは歴史考古学を目指す若い学徒への魅力溢れる誘いの書といえよう。

（四六判、二三八頁、吉川弘文館、二〇一八年四月刊行、本体価格一八〇〇円＋税）

（はせがわ・せいいち 弘前大学名誉教授）